美術科教育学会通信

１９９８年 3月 3日 発行　　美術科教育学会本部事務局　Ｎｏ．２８
〒184-0015 東京都小金井市貫井北町４丁目１－１　東京学芸大学
美術科教育学研究室内 TEL.0423-29-7608,7610（柴田・増田直通）　FAX. 0423-29-7599

20周年記念　大阪大会を迎えて

花篤 實（大阪教育大学）

美術科教育学会が、奈良の地で鈴木・大勝両氏の呼びかけで教育系大学の美術科教育担当の教員の自主的な研究会としてスタートしてから今回の大会で満２０周年を迎える。最初から関わった教員の一人として感無量である。スタートする数年前には、東京学芸大と大阪教育大の大学院が開設され、引き続いて全国各地の教育系大学に大学院設立の準備が整っていった。それゆえ、研究会が自然にそうした大学院生の研究発表の場として発展して行くことも、まさに時代の流れであった。当時の若手教官が学会にすることで、形骸化するアカデミズムになるのを懸念した反対を押し切って、学会成立を推進したのは、当時の院生たちのパワーだったのである。そして、５回目の研究会を第１回の学会として大阪で成立させ、その後各地の大学院の開設に伴って全国的な美術教育の学的研究の学会として院生を中心に発展して来たのは、ご承知の通りであるが、今回再び大阪の地で２０周年記念学会を引き受けることになったのは、奇しき縁といった思いすらする。しかも、最初に集まったメンバーで最後まで現役で残っていた一人として、定年を学会で閉められる機会を戴いたことの個人としての意義も含めて感謝して止まない。

それ迄美術教育研究の専門養成の場を持たなかった教育系大学において、この学会に結集した院生が次々と大学に入り、やがてその指導院生が研究活動に入ってきた２０年という時間の重なりは、それなりに学的研究の成立の場として、この学会をオーソライズして行き、その性格づけをして来たと思うが、２１世紀を目前に今日の教育改革、特に教育系大学のリストラの荒波の中で、今一度学的研究や学会の位置づけを検討していかなければならなくなってきたという思いは共通される。最近の学会通信にも掲載された院生の単なる業績づくりの場になっているという会員からの批判は、改めて今後学会をどう方向づけて行くかという課題を学会に突きつけてきている。大学美術教育学会と違って、資格によらない美術教育の研究を志す人の自由な学会として、学術会議にも登録し真の学会としての歩みを続けてきたこの学会の特性こそ、今後展開されて行くであろう教育の自由化やメディア、美術を巡る場の広がりに、十分に対応し得るという確信と展望を持ちたい。

今回の大阪大会は初日の柏原会場に加えて、あえて主行事を２０年前の姿で残る取り壊し寸前の老朽化した天王寺校舎（市内）で開くのも、移転された柏原キャンパスが校舎設備が整っても交通不便で宿泊や食事の設備が運営に対応できないという問題が絡んだとはいえ、この際２０年、３０年前の日本の教育系大学の一般の姿を思い起こし、併せて教育研究に必要な情報機能を外してまで遠隔地に移転孤立して行く大学の在り方まで含めて、学会２０年の総括と重ねて振り返ってみようという我々なりの意味付けを加えたからでもある。今回準備や運営で大阪関係の学会員の自主的な協力を仰げたのも、こうした意味をご理解戴けたものと感謝している。勿論校舎設備や発表機器などで会員の皆様にご不便を掛ける事の危惧はあり、寄り合い所帯の運営が逆に運営の緻密さを欠く結果になり、ご容赦願わねばならない所が頻出すると思うが、参加会員諸氏に前以てご理解、ご協力戴けるよう紙面をお借りしてお願い申し上げる次第である。最後に学会開催に際してご指導を戴いた宮脇代表理事並びに事務局の方々に感謝しつつ、３月に大阪の地で多数の会員の皆様とお目にかかれる事を念じている。

美術科教育学会・公開シンポジウムを終えて　*1998/01/31*

宮脇　理

美術科教育学会・公開シンポジウムは、１９９８年1月１０日、大阪教育大学天王寺学舎にて第２０回（最終回）を飾りました。これで当初より想定しておりました５年に亘る企画を終了したことになります。関係の皆様、まことにご苦労さまでした。

このこの公開シンポジウムは通称「出前シンポ」と呼称しておりますように、慣習的なシンポジウムとはかなり趣を異にしています。その特質は何といっても、企画者、参加者がすべて手弁当によって各地を移動しつつ、学会理事ならびに会員の積極的な運営によって、学会独自の立場で、或いは当シンポジウムの趣旨に賛同された他の組織との共催によって実施されてきたことです。

１９９２年１１月２８日、東京・大田区立池雪小学校において、第１回目を開始したこの公開シンポジウムが盛会裡にて完了したのも、理事各位、学会員の皆さんの努力と応援をして下された多くの参会者によって、各地区固有の想い入れが反映され、また学会と直結させた「プレ学会」など、皆さんの熱意と実行力が結果したのだと思います。

しかしなんといっても、このシンポジウムの実施後の爽やかな後味は、後半こそ本部から若干の通信費補助の裏付けがなされましたが、基本的には**「企画者・参加者がすべて手弁当によって」**ということに多くの理由があるようです。私が２０回を完走させてもらったのも単に企画、組織の責任者であるばかりではなく、この爽快さに起因することが大きいのです。そして現在の世情を観るにつけ、運動を進める初心を消し去ってはいけないことだと痛感しています。

前後しましたが、先に述べたことに続いて、この公開シンポジウムの企画と運動の大きな特徴としてシンポジウムに「網状」的構造を模していることです。

すでにインターネットが展開される今日ではもはや当たり前の趣意と方法論になりつつありますが、このシンポジウム構想を５年前に提示したときは、周知のイヴァン・イリッチの網状組織に重なる具体的な人間交流の場を持とうとする意味を込めていたのです。

その必然性とは、いみじくも故・ドゥルーズ（Gilles Deleuze〈1925～1995〉）やガタリ（Gelix Guattari〈1930～1992〉）等が現代を評したように、すでに当時が（資本主義が生み出す）自己調節機能を全く持たない「欲望機械」と対峙する状況の渦中に、私たちが置かれはじめていたということへの危機意識でもありました。

さて、学会の「成熟」を目的とし、斯学の「運動」を切り開く端緒として提案したこの公開シンポジウムも２０回をもって一応終了いたします。

先述したような行動様式を発条（バネ）として起動した当公開シンポジウムのテーマにつきまては、**「美術科教育学会・公開シンポジウム実施の系譜」**を見ていただければおわかりのように、実に多元的であり、かつこれを支えるのはいずれも各地において問題、課題となっている内容であり、斯学の成熟へ向けてそれぞれの立場からの動的なエネルギーを投げかけてくれた「小史」を残しております。

そして僭越ながら私が感じたところでは、理論と実践の相互に架橋するというマス・デモクラシー時代にふさわしい「相互啓発」的な場、形式的な啓蒙を彼岸とする世界がいささかでも開かれたのではないかと思っています。このことについてはいずれ場所を変えて学会に関わる教養論を書くことで責に代えさせていただこうと思っています。

美術科教育学会・公開シンポジウム実施の系譜　1992/11/28～'98/1/10

:宮脇メモ 1998/01/26

＊第１回：日時　１９９２／１１／２８<土>
テーマ「国際化・文化主義の中の美術教育の可能性」
開催場所　東京・大田区立・池雪小学校

＊第２回：日時　１９９３／０２／１３<土>
テーマ「楽しい図画工作、美術教育を巡って」－遊びが教育になり得るだろうか－
開催場所　大阪・サクラクレパス本社

＊第３回：日時　１９９３／０４／１７<土>
テーマ「造形教育における<感性>の位置ずけ」
開催場所　横浜・横浜美術館子どものｱﾄﾘｴ

＊第４回：日時　１９９３／０５／０９<日>
テーマ「美術教育の今日的課題」－現代の流動的状況からの問い直し－
開催場所　東京・東京学芸大学

＊第５回：日時　１９９３／０８／０９<月>
テーマ「信州の自由図画教育運動とこれからの美術教育」<プレ学会>
開催場所　長野・信濃教育会講堂

＊第６回：日時　１９９３／１０／２７<水>
テーマ「個性がふれあう造形教育」　<第２３回富山県造形研究大会と共催>
開催場所　富山・富山市立豊田小学校

＊第７回：日時　１９９４／０６／０４<土>
テーマ「総合化・選択化の中の美術教育」－図工・美術科教育は生き残れるか？－　<プレ学会>
開催場所　和歌山・紀の国会館

＊第８回：日時　１９９４／０８／１２<金>
テーマ「造形芸術の継承と発展」　<佐賀造形学習会・第１１回夏期ゼミナールとの共催
開催場所　佐賀・はがくれ荘

＊第９回：日時　１９９４／０９／２０<火>
テーマ「地域差から問う今日の美術教育」
開催場所　北海道・北海道教育大<函館>

＊第１０回：日時　１９９４／１０／２８<金>
テーマ　「子どもと教師」　<東京都図工研究会・多摩図工研究会との共催>
開催場所　東京・田無市立向台小学校

＊第１１回：日時　１９９４／１１／１２<土>
テーマ　「基礎データベース構築について」
開催場所　宮崎・宮崎大学

＊第１２回：日時　１９９５／０１／１４<土>
テーマ　「造形教育の今日的課題」　<第３２回沖縄県造形教育研究大会との共催>
開催場所　沖縄・那覇市壺屋小学校

＊第１３回：日時　１９９５／０９／３０<土>
テーマ　「中学校美術教育は積みすぎた方舟か」
開催場所　横浜・横浜美術館子どものｱﾄﾘｴ

＊第１４回：日時　１９９５／１１／２３<水>
テーマ　「開かれた美術館をめざして」　<名古屋市美術館との共催>
開催場所　愛知・名古屋市美術館講堂

＊第１５回：日時　１９９６／０２／２４<土>
テーマ　「心のケアとしての美術教育(ｱｰﾄｾﾗﾋﾟｰと美術教育)」
開催場所　大阪・ｻｸﾗｸﾚﾊﾟｽ　本社ビル７Ｆ

＊第１６回：日時　１９９６／０８／２８<水>
テーマ　「もう一つの美術教育・わたしの美術・工芸への道」－外側から見た学校美術教育－<プレ学会>
開催場所　徳島・鳴門教育大学　附属幼稚園

＊第１７回：日時　１９９６／１１／０９<土>
テーマ　「学校のうちそと・美術のうちそと」
開催場所　福島・福島大学

＊第１８回：日時　１９９６／１２／１４<土>
テーマ　「教育改革の動向と美術教育」
開催場所　東京・お茶の水女子大学附属中

＊第１９回：日時　１９９７／１１／２９<土>
テーマ　「美術教育と日本文化の特質」
開催場所　福岡・福岡市美術館講堂

＊第２０回：日時　１９９８／０１／１０<土>　最終回
テーマ　「大阪のパワフル美術教育は、いま！」　<プレ学会>
開催場所　大阪・大阪教育大学／天王寺／講堂

第20回大阪大会の企画から

第２０回美術科教育学会大阪大会の概容は先日お送りしました最終案内の通りですが、大会分科会での発表者に関係の深い「オープン・トーク」(28日13時～14時20分)につきまして、重ねて案内をさせて頂きます。以下にお示しします文章は、企画担当の上山浩理事の企画書からの抜粋です。

□趣旨

前回の鳴門教育大学では分科会別総括討議として、各分科会での口頭発表題目に沿った討議の場が設けられ、それぞれの研究発表の補足や質問の継続を交えて活発な討議が行われた。この分科会別総括討議の趣旨を継続し各研究発表内容を起点とした討議を行う。また、ここでの討議は、それまでに行われるリレートークおよびフォーラムでの議論を受ける形となり、各参加者が個々にもつ問題意識に沿った具体的な議論の展開が期待できる。さらには、実践者と研究者とがそれぞれの立場からの意見を交換し合う場となることも期待できる。

□形態

研究発表に用いた６室を用い、それぞれにテーマとコーディネータを設定したセッションを設ける。各セッションのテーマは研究発表の内容を総括しさらなる発展を期待するものとするが、各発表者がどのセッション（テーマ）を選ぶかは自由とする。発表者がどのセッションを選択したかは、口頭発表の補足や質問を継続する必要上、掲示などの方法で学会参加者に公示する。コーディネータは、原則として口頭発表者の補足や質問を促したり、その他の参加者の見解を引き出すなど、討議を活性化する役割を担う。それぞれのセッションの記録を学会誌等に公表する予定。

□セッションテーマ（予定コーディネータ）

- □教材の研究から（武田薫・北海道教育大学旭川校、竹井史・富山大学）
  芸術の論理を含め、教育手段たる教材の在り方を追求することを起点とする。
- □子どもの心理・発達の理解から（長谷川哲哉・和歌山大学、福山博光・北海道教育大学岩見沢校）
  子どもたちをどう理解するかという教育の根本的な問題を起点とする。
- □海外の動向・異文化理解から（岡崎昭夫・筑波大学、栗山裕至・佐賀大学）
  海外の状況に目を広げ、異文化の中で自己相対化する視点を起点とする。
- □美術教育の歴史から（金子一夫・茨城大学、山木朝彦・鳴門教育大学）
  過去を振り返り、時間の流れの中で自己相対化する視点を起点とする。
- □鑑賞・美術館教育の在り方から（柴田和豊・東京学芸大学、中本岩夫・ＰＬ女子短期大学）
  美術の消費という社会的要求を中心とした視点を起点とする。
- □マルチメディアの理解から（福本謹一・兵庫教育大学、上山浩・三重大学）
  情報化という今日の社会状況をどう取り込むかという視点を起点とする。

役員交替に向けて

昨年末の役員選挙で選出された役員を主体とする新役員体制が、総会の承認を経た後、４月からスタートします。目下、正副代表理事、本部事務局役員などで構成される総務会では、合理的な新体制の構築に向けて、事務局の在りよう・役員の役割分担を中心に、反省並びに提案すべき事項を洗いだし中です。その骨格を学会総会でお示しできればと思っています。